

# サイエンスコミュニケーター だより

Volume 09, November, 2018



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや 200 名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんとをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

## サイエンスコミュニケーターの声

### 地方におけるサイエンスコミュニケーション活動の一例

私は講座を修了した次の年度に就職し、静岡県静岡市の工場に配属されました。その後、勤務のかたわら、地方でのサイエンスコミュニケーション活動（SC 活動）の展開に試行錯誤をしてきました。ここでは、これまで実施したいくつかの SC 活動を紹介しつつ、感じたことを紹介します。

#### 地方でもみつかった！ SC 仲間

地方で SC 活動を行いたいと思っても、一人ではなかなか活動はできません。幸運なことに市立科学館において科学コミュニケーター育成講座が開かれていたので、まずはそこに参加することにしました。結果、そこで意気投合したメンバー（平日は仕事、休日にボランティア参加している市民）と SC グループを結成し活動を始めることができました。また、科学館の館員の中には、SC に興味を持っている人や元々都市部で SC に携わっていた人もおり、貴重なつながりを作ることもできました。

#### 地域で違う SC 活動のニーズ

私が配属された静岡市では、講演会・科学教室のようなものが多く求められており、東京の国立科学博物館で学んだサイエンスカフェやディスカバリートークとは異なるニーズがあるということを感じました。

特に需要が高まるのが夏休みの自由研究に関する時期で、「君もガリレオ?! 望遠鏡を作っちゃおう」と題したイベントでは、題材探しに熱心な小学生が集まり、非常に満足度の高いイベントとなりました。

開催時に公民館の職員と調整を密にしたおかげで、次の地域祭でのブース出展の依頼が来たという副産物もあり、地域に根付いてイベントを定期開催するうえでは、場所の提供者とのコミュニケーションも重要だと感じました。

#### ニーズをつかんで地域を巻き込む！

最後にご紹介するのは、自分の職場、科学館、小学校を巻き込んで開催した「札（サッ）と学ぼう！ものづくりのポイント」という職場体験ワークショップについてです。小学 5、6 年生の授業の一環として、200 人弱の児童に向け実施しました。

このイベントは工場最寄りの小学校の校長先生から「お宅は面白いことやっているのに中が見られなくて残念だよ」と言わ

れたのが発端となり企画しました。工場としても地域とのつながり強化は求められており、聞く側と実行側のニーズが合致したイベントだったので楽観視していましたが、企業秘密漏えい防止の観点から、イベントの設計は慎重に行いました。

最終的に、企画の内容については「広報で開示されている範囲で行う」ことを大前提とし、「総合学習の時間」の講師として、さらに小学校から前出の科学館を経由して職場に依頼することで企画者の信頼性を保証してもらうことにしました。

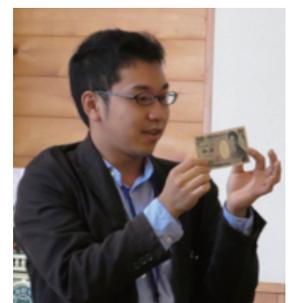
45 分 1 コマ× 4 時間分のイベントは子どもたちに非常に印象に残ったようで、数日後複数の職員から、「長澤くん、小学校で先生やったって？うちの子どもから聞いたよ!」という話も聞くことができ、家庭内での SC が図られたという喜ばしい結果も得られました。

#### おわりに～ニーズを把握する大切さ～

活動を振り返って総じて思うのは「ニーズをしっかり把握すること」の重要性です。地方特有の需要をつかむことができれば、職場・地域の協力も仰ぎやすくなると感じます。みなさんも、飛び込んだ土地で刺激を受けて、その地方にあった SC 活動を実践してみたいはいかがでしょうか？



新鮮な反応満載のワークショップ



#### 長澤 慎之介

国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター（SC1:3 期, SC2:4 期）。専門は高分子化学、品質管理など。趣味は落語。（独）国立印刷局に勤務し、研究と製造の架け橋になれるよう現在奮闘中。



静岡 SC 活動の 1 コマ

# 科博 SCA 第 4 期 (2018 ~ 2021) 代表挨拶

## 持続可能な SC を目指して



科博 SCA の代表を 2015 年から 3 年間務めてまいりましたが、今年 6 月に開催された総会で再選していただきました。1 期目の間には、年 2,3 回の交流会の企画運営、会員向け名簿やロゴマーク・blog などのインフラ設置など、あったらいいなと思うものを具体的に実現させることができたのではないかと思います。引き続き「持続可能なサイエンスコミュニケーション」をモットーに、2 期目では 1 期目の間に整えたプラットフォームを活用していきつつ、他の SC 組織との連携や後進の育成を進めていく所存です。今後とも科博 SCA の活動を楽しみにしていきましょう！  
(科博 SCA 代表 水川 薫子)

## 活動紹介

科博 SCA の会員は、サイエンスコミュニケーションに関連するさまざまな活動を行っています。今回は、サイエンスコミュニケーター養成実践講座のプログラムの一部として開催された 2 つのトークイベント、SCA 会員による団体が開催したイベントと、科博 SCA 代表の着任挨拶をご紹介します。

### おいしさの本質を求めて

#### 2018 年度 SC 講座受講生ディスカバリートーク その① (2018 年 8 月 14 日開催)



私はおいしさを味覚からアプローチする研究をしています。おいしいものが人を笑顔にするように、私の発表もお客さんを笑顔にする事を意識しました。そこで「おいしさ博士の見習い」が研究の楽しさを伝えるというテーマで発表しました。私たちの身近にある味覚の研究が進んでいない事がしっかり伝わっただけでなく、発表自体も楽しかった事が、質問やアンケートからもわかりました。この発表を通して伝える楽しさを改めて実感し、自分の研究だけでなく、様々な分野の科学の面白さも伝えていきたいと考えようになりました。

(SC 講座 13 期修了生 中安 亜希)

### はやぶさ 2 今後のニュースにご注目

#### 2018 年度 SC 講座受講生ディスカバリートーク その② (2018 年 8 月 14 日開催)

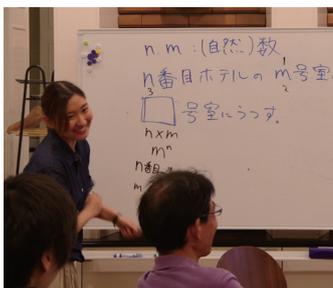


探査機「はやぶさ 2」のミッション概要と、はやぶさ 2 が今まさに探査を行っている小惑星「リュウグウ」の誕生から現在に至るまでの歴史に関する自分の研究について紹介しました。前半では動画を用いて探査の流れとサンプル採取装置やカメラ等の搭載機器を紹介し、後半ではリュウグウ等の小惑星の研究が地球の過去の環境を推定するヒントになり、そこから地球や生命の起源に迫れるかもしれないという可能性を示しました。今後ははやぶさ 2 に関するニュースを見た時に、今回のトークを思い出していただくと嬉しいです。

(SC 講座 13 期修了生 鈴木 雄大)

### サイエンスカフェ「数学の研究者と "無限" に惚れる日曜日」

#### (2018 年 7 月 22 日開催)



「わちゃっと」では、純粋数学を研究している大学院生の竹内愛理さんをゲストにお迎えし、「無限」をテーマにサイエンスカフェを開催しました。「無限」という言葉は日頃から耳にしますが、数学研究における「無限」とはどのようなものなのでしょう？「客室が無限にあるホテル」などといった具体的な問題を交えながら、竹内さんと参加者で考えを巡らせた 90 分間となりました。竹内さんの見事な解説に参加者が惚れ惚れする場面も。「わちゃっと」はこれからも、科学の面白さや研究者の人間味を身近に感じられるサイエンスカフェを開催していきます。  
(科博 SCA サイエンスカフェ分科会 藤原 亮太)